○ 広島の復興の軌跡・人物編（第１９回）～長岡省吾初代原爆資料館館長

～原爆資料館の基礎を築いた不遇の偉人～

今までは戦後復興そのものの過程で直接的に貢献した関係者を対象としてきたが、今回は広島の復興過程をより広く捉えて、その過程において登場して何かの担い手になった当事者に迫っていくこととする。まず対象人は、今まで脚光を浴びることの少なかったとされる長岡省吾氏、その人である（本文は敬称略）。

１．はじめに．資料館のグランド・リニューアルオープンに当たって

原爆資料館（正式には平和記念資料館であるが可能な限り通称で済ますこととする）が本年４月、２度目の大規模改修を終えて本館を含めて再開館を果たした。資料館の展示・運営に対しては今後様々な検証・見直しが行われるであろうが、いずれにしても原爆資料館が広島にとってなくてはならない役割を担うものであり、欠くことのできない存在であることは大前提であり、さらに望まれる方向性が常に模索されるべきである。

この資料館の創設・開設を進めたのは、当時の広島の総意というわけではなく、極めて特異な形での準備と決意と、意思決定の結果であった。最近相次いで長岡省吾伝記本が出版された。1 冊は佐藤真澄「ヒロシマをのこす／平和記念資料館をつくった人・長岡省吾」（汐文社、2018 年 7 月）であり、もう 1 冊は、石井光太著「広島を復興させた人びと／原爆」（集英社、2018 年 7 月）であった。前者（文献 1 とする）は長岡人生そのものの真実に迫っている。後者（文献 2 とする）は長岡だけでなく浜井信三、丹下健三、高橋昭博を併せた 4 名を対象としたものであり、長岡と原爆資料館の物語が全体のバックボーンになっている。

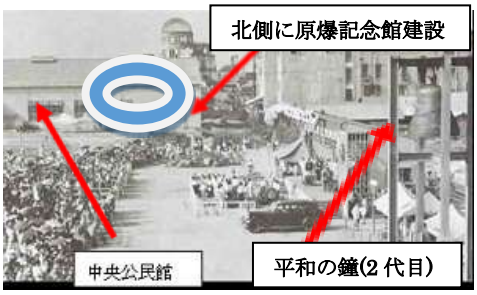
以下、現段階で長岡省吾に迫っていくため、既存資料を利用しての考察としたい。

２．長岡省吾の登場を奇跡的に可能とした過酷な境遇と環境

長岡が被爆の痕跡に注目したのは、原爆が投下された翌々日、すなわち 1945 年 8 月 8 日に入市し（文献 2 では 8 月 8 日、文献 1 では 8 月 7 日）、護国神社の石灯籠の土台の表面が泡立ち、刺のようになっているのに触り、見たことからであった。“これは通常の兵器による仕業ではない”、長岡の職業的直観であった。やがて被爆の痕跡を示す資料の収集へと踏み出していく。それは並みの方法ではなく、常識を超えたやりかたで、資料の類型・質を高め、必然的に量を増していく。

しかし、長岡をめぐる環境は過酷さを極めた。周囲の理解は進まず、孤軍奮闘状態であった。長岡の原爆資料への第一歩は、被爆による外見上の変化への興味・関心とされる。学問的にいえば、長岡は理学部の岩石学研究分野での資料収集行為であろう。当時、被爆による変色・異質の瓦は至る所に存在し、とくに珍しくも貴重でもなかった。強いて言えば、より激しく刻印された瓦、より変形した瓦、他の物質と融けあい、結合した姿の特異性、といった注目点でみれば、価値あるものであったろう。

３．空間的な整備状況



長岡の被爆資料の収蔵は、当初、長岡の自宅対応であった。文献 1 によると“奇妙な拾い屋”として石や瓦などが集められたとき、長岡の妻は「この拾うてきたもん、もううちには置かんといてください。（中略）近所のもんはみんな言うとるんですよ。あのガラクタにはピカドンの毒がついとるゆうて」と懇願したというのである。このように、受け入れ条件は必ずしも整っていなかったのであるが、結局は長岡の強い意思を受け入れられた。後に、長岡の協力者も出現し、長岡後援会が組織され、原爆資料蒐集後援会、原爆資料集成後援会、原爆資料保存会と名称を変えながら長岡の活動の支援も存続した。当初の収集対象の石や瓦だけでなく、つぶれた自転車、溶けて変形したビール瓶、炭化したご飯の入ったアルミの弁当箱等にも拡大収集され、後の原爆資料館の展示にも結び付くこととなったのである。

ついに長岡は広島文理科大学嘱託を辞し、ますます原爆資料の収集に没頭していった。そのとき浜井市長の注目するところとなり、1948 年末、長岡は広島市嘱託職員となった。1949 年 7 月、基町の市民広場に広島市中央公民館が建設・開設された。長岡は、当初、秘書課付きとして、被爆資料の石ころや瓦などを持ち込んで嫌がられ、市長公室に移動させられても、同じように資料を持ち込まれるので、ついにこの公民館の一室が与えられた。長岡は、早速大量の被爆資料を持ち込み、公民館開設の 2 か月後の 9 月、原爆参考資料陳列室の開設ということになった。

ここ市民広場では1949年8月、第3回平和祭が挙行され、2代目の平和の鐘が打ち鳴らされた。市民広場には児童文化会館建設と併せて、軍用地転じて一層市民広場らしき環境を整えていった。1950年8月には、公民館の北側に建物が新築されて、原爆記念館と呼ばれて開館し、資料陳列室から一歩整備が進み、長岡にとって順風状態といえた。

一方、中島公園では平和記念公園コンペにより丹下案が選ばれて、陳列室が予定された。しかし、現実はそれほど単純、順調とはいえなかった。平和記念公園での建物建設は1951年3月に起工されたが、難渋を極め、幾度も工事中断となった。竣工は1955年となり、ようやく8月に平和記念資料館として開館し、初代の資料館館長として長岡省吾が就任したのである。しかし資料館が本来の機能として整備されていくまでには多くの難題が降りかかっていく。

1973年2月、長岡の訃報を報じた新聞は、「原爆資料館の生みの親、育ての親、汗の結晶、1700点死ぬまで収集に執念」の見出しであった。さらに長岡の苦難と挫折をもう少し続編で辿っていきたい。

（編集委員　石丸紀興）

長岡省吾の略歴：1901年8月ハワイ生まれ。父の実家は広島県玖波町。終戦直前まで中国東北部・哈爾浜等で地質調査の業務に携わっていたとされるが、その経歴に封印する意向を持っていたようである。帰国して1944年から1947年まで広島文理科大学地質学教室に勤務。嘱託で地質学の実地指導。直接被爆していないが、文献１によると翌日から（文献２によると翌々日から）広島市内に入り、被爆の惨状を目の当たりにして地質学者として期するものがあり、以後の人生を大きく規定した（本文において言及）。1955年完成なった原爆資料館の初代館長、6年ほどの勤務後退職、1973年2月逝去、享年71歳。